# 書 評　Book Review

## Informative Morphogenetic Variants in the Newform Infant

K. Méhes, Akadémiai Kiadó, Budapest, pp. 228.

1983年に刊行された"Minor Malformations in the Neonate"の改訂版だが，初版の内容を大幅に拡充し，面目を一新しているから，新版と考えてよかろう．B6判，ペーパー・バック，228ページ，価格16ドルの小著だが，その内容は目を見張るものがある．

著者は Hungary, Pécs の大学小児科の主任教授で，1970年代の初頭から新生児の形態変異に関する論文を多数発表しているから，読者の目に触れているはずである．最近のものでは肩の皮膚の臍状の陥凹の優性遺伝に関する論文が *Human Genetics* に載った．

本書は2部に分かれ，第一部は著者がスクリーンした4,589例の新生児の41種の形態変異の頻度と，その類似の研究との比較を行っている．形態変異 (morphogenetic variants) は著者によれば小奇形 (minor malformations)，小変形 (minor deformities)，小異形成 (minor dysplasias)，小変異 (minor variants) に分類され，前三者は悉無率に従い，後者は連続的に分布する正常形態の一端を代表する．

第二部は41種の形態変異を上記の4種に分類し，それぞれについて頻度，遺伝性の有無，診断，鑑別診断，臨床的意義，文献(1970年代以降1986年まで)を記載し，写真を付けてある．形態変異を選ぶに当たっては観察が容易で特殊な器具を必要としないものに限っている．例えば虹彩の Brushfield spots は新生児では観察が難しいので除外している．収録されているものには単一臍帯動脈，二分口蓋垂，血管腫(ただし前額中央，項部の毛細血管腫は含まない)，足底の皺，足蹠の突出，ショール様陰嚢を含んでいる．大奇形に伴うもの，多発奇形の部分症状としての形態変異は一応記録するが，頻度の計算からは除いている．

新生児の形態変異の記録に当たって採るべき方針としては次の諸点を挙げている．1）あらかじめスクリーンする形態変異の種類，規準を定めておく．2）小奇形，小変形，小異形成，小変異を区別する．3）家族性の変異を除外する．4）民族的，地理的差異を考慮する．5）症候群の部分症状としての形態変異は別に扱う．6）観察者によるバイアスを避けるため，計測を併用する．

翻ってわが国の現状を考えると，上記の諸条件を満たし，しかも多数の新生児をスクリーンした仕事は見当たらない．この研究に比肩できるようなものが出現することを願うものである．

（山口大学 医学部 小児科学教室　梶井　正）